

山桜会 90 周年記念 太平洋戦争中及び戦後の 偕行社付属小学校と追手門学院



小59・中2 秋山 陽彦



▲ 筆者 一年生

初めに

今日隆盛をきわめる我が追手門学院にも、太平洋戦争中や終戦後には存亡を賭けた苦難と激動の時代があった。われわれはそのただ中を先生や保護者と共に懸命にくぐり抜けて来たが、残念なことにその時代の記録はほとんど残されておらず、当時在学したわれわれが高齢化していけば記憶は永遠に忘れ去られてしまうことになる。これは追手門学院にとっても私共にとっても大きな損失であると思う。山桜会90周年、更に学院創立120周年を迎えるにあたり、過去のこういう一時代の延長の上に今日の追手門があるのだということをは是非知っておいて頂きたいと考え、拙文を寄せることにした次第である。

入学から疎開まで

▶ 入学

我々59期生は昭和17年、大阪偕行社学院に入学した(前年まで大阪偕行社付属小学校とよばれていた)。太平洋戦争が始まってまだ半年たらず、戦況は右上がりまさに軍国色真っ只中で、規律は非常に厳しく先生は皆こわかった。私は幼時から弱虫で、一年生になっても動作がのろく運動も出来ず、叱られてばかりいた。

▶ 登校

偕行社前(京阪東口)で市電を降りると、居合わせた生徒の中の高学年の人が小隊長になって隊列を組んで登校する。校門前で「歩調とれ」、「止め」、「校章に「敬礼」し更に校舎の東南の角を曲がって運動場の向こうの奉安殿に向かい「敬礼」、昇降口で解散する。

上町筋や京橋口の坂は今と同じだが、市電が走っており、滑り易かったのが当時荷物を運搬していた馬車が坂を登れずよく立ち往生していた。「小隊長」の命令一下、皆であと押しをして馬方さんから感謝された。雨が降っても外套は着るが傘はささない。兵隊さんと同じである。場所柄しばしば将校さんに出会う。敬礼をすると将校さんにもこやかに敬礼を返してくれるのがたいへん嬉しかった。

▶ 運動場

登下校以外は全員はだしである。霜の降りた朝、雪の日など本当につらかった。(何故か先生と週番は靴をはいていた。うらやまして早く高学年になって、週番になって運動靴をはきたかった)全生徒が運動場に整列し朝礼、「金剛石」と「偕行社付属小学校校歌」を歌う。校長先生は山口大佐であった。終わって全員運動場に散らばり、一人何十個かずつ小石を拾う。清掃と、はだしで怪我をしないようにと考えられたのだろう。これは大変効果的であった。この伝統は現在もなお続いているという。素晴らしいことだ。全員はだしだから、足をきれいに校舎に入るために昇降口の左側に「足洗い場」があったのである。

▶ 中庭

今の中庭より狭かったが、北寄りには睡蓮が咲き鯉が泳ぐ美しい水槽があり、南の方には布張りの翼が銀色に塗られた複葉機の練習機が置いてあった。誰でも自由に乗ることが出来、操縦桿や方向舵を動かすこともできた。自分で動かせる機械が少ない校内では大変人気があり、いつも生徒であふれていた。

▶ せいじつ ごうき

校歌は口伝に近かった。「日々の努めに誠実剛毅、自治の教えを守りつつ」歌詞をもらっても読めない。「ヒミツトミニ、セイシツゴウキツ、ジジノオシヘラ…」。ゴウキツではなく、ゴウキ! と山田先生によく叱られた。結局大人になるまで何のことかわからなかった。しかし、陸軍に関連のある学校がこの精神を掲げていたことは特筆に値する。学校は「自治」を守るためしばしば偕行社と衝突したこともあると聞いている。この精神は時代にそって少しずつ形を変えながら今日まで脈々と受け継がれている。

▶ 勅語

式典がある度に勅語が読まれた。講堂の壇上に奉安所があり、御宸影と勅語が祀られている。全員起立、最敬礼の中、教頭先生が白手袋をして恭しく勅語を取り出し校長先生に渡す、校長先生は巻物を解き、抑揚のないしかし厳かな声で読まれる。皆頭をたれて聴く。何のことかわからない。とにかく頭を上げてはならない。絶対に見てはいけない。そんなことをしたら「時計の裏の部屋」へ入れられる。校長先生が「御名御聖」か、「全くせむ事を期せよ」と言われたら終わりだと教えられた。「御名御聖」が終わって長い長い巻物を校長がゆっくりと巻き戻され、奉安所にしまわれ、扉が閉められて御宸影が見えなくなって初めて頭を上げられる。本当に長かった。あとで知ったのだが、御宸影の真上にあたる屋上には立入禁止の柵がしてあった。

▶ 教室、授業

校舎は鉄筋コンクリート造、当時としては抜群のもので床、柱、窓、階段、机、など何れもすばらしい材質で、水洗トイレ、スチーム暖房も完備していた。特に音楽教室、理科室などの設備は目を見張るものがあった。道場(体育館)にはヨーロッパ式の運動用具が完備していた。武器庫の銃架には教練用だがピカピカに手入れされた小銃が数十丁、整然と並んでいた。また教室や廊下は塵ひとつ無く、いつも油拭きされていた。

ポケットに手を入れてはいけない、廊下を走ってはいけない、授業中は便所へ行ってもいけない、弁当は早く食べなければいけない、椅子に座るときは背筋を伸ばして手は膝、拳手はゲンコツで挙げる等々いろいろな規則があった。弁当の前には級長の号令で全員が「皇恩を感謝し、大御心を戴いて魂を磨き、体を鍛え、正しく強い日本人になります」と大きな声で言ってから頂いた。弁当を食べるのが遅いとそれだけ昼休みは少なくなる。

授業も当然厳しかった。先生は棒、平手、時には飛び道具(チョーク等)で急げている生徒に注意されるのが常であった。生徒は皆痩せていたが、輝いた目で背筋をしゃんと伸ばし昂然としていた。弱虫の私はいつも叱られてばかりで落ち込んでいた。今ならカウンセラーがつくところだろう。もしこういう生活が長く続いていたら破綻していたかも知れない。幸か不幸か、戦争が激化していった。

▶ 供出

戦況が不利になり、兵器や弾丸にする金属が足りないということで、金属、貴金属類の供出がひろく求められた。学校も当然これに協力した。楠木正成の銅像、スチーム暖房の装置、偕行社の塀の飾りなどが供出された。

しかし、何故か中庭の鐘、階段の飾り金具、本館の灯具や講堂のシャンデリア等は残った。講堂の灯具はいま本館に移されている。